

中国親族呼称の諸相

——その成り立ちと転用——

劉 穎

はじめに

中国では、人物に対する呼称が言語交流においては非常に重要な要素である。馬宏基・常慶豊（1998）は「懂得对别人如何称呼是一种知识，也体现了一个人的文化教养。」（人の呼び方をわかまえることは一種の知識であり、またその人のもっている教養度をも表しているものである。）と述べている。中国では往往にして相手に対しての呼び方が適切ではないため相手を不愉快にさせたり、会話をスムーズに続けられなくなったり、または中断せざるを得なくなったりすることがある。

周知のように、日本語にはたいへん複雑な敬語体系があって、日本語を用いての言語交流においては非常に重要な役割を果たしているのである。中国語、特に現代中国語にはそういった敬語体系はないが、日本語の敬語に相当する複雑な呼称体系、特に非常に厳密な親族呼称の体系がある。『現代漢語詞典』では「称呼」（呼称）について次のように解釈されている。「当面招呼用的表示彼此关系的名称」（対面して用いる互いの関係を表わす呼び名）である。その呼称体系は人人の社会的属性や地位・交際行為に関する価値観、また言語交流における心理的態度などを強く表わしている。呼称の運用は、具体的な交際場面・交際対象及び交際目的に密接な関係があるだけでなく、その民族の文化や社会的構造及び集団意識にも強く影響される。

呼称は、一般的に「社交呼称」と「親族呼称」に分けられている。社交呼称は時代背景に大きく影響される。時代性がとても強くて、その時代その時代に新しい呼称が多く生まれてくる。それに対して親族呼称は比較的安定している。それは血縁関係が基盤となっているからである。

親族呼称は、地域性があるが時代性はそれほどなくて、使い方も相対的に固定しており、変動が比較的少ない。親族呼称は「面称」（向かい合ったときの呼び方）と「背称」（会話の場にはない人物に対する呼び方）に分かれているが、社交呼称はその区別はない。

この小論では主に中国語の中の親族呼称の使い方・意義及びその現実場面への転用のしかたについて検討してみたい。

1. 親族呼称の成り立ちとその意義

中国で現在も使われている複雑な親族呼称がいつごろ成立したかについて明記されている文献はないが、『《尔雅・释親》札記』（張清常著）や、『称谓録』（梁章鉅著）によれば、その使い方や意義を初めて紹介されたのは上古の『爾雅・釋親』だと思われている。それに記載された親族呼称はそれまでの文献に出ているものとほぼ同じで、後世のものとは違いがあるからだ、と言語学者張清常氏は遺作『《尔雅・释親》札記』の中に述べられていた。『爾雅』は中国のもっとも古い辞書であり、その中の「釋親」の部はその時代までに使われていた親族呼称を四つの系統に分けて紹介している。以下、これらの数多くの親族呼称がどのように生まれてきたのかを考えてみたい。

中国は太古の時代、つまり原始社会では生産力が低くて、人人は生存のために互いに協力し合い、互いに依存しなければならなかった。その時代に人と人との間には差別というものは存在しなかった。『呂氏春秋・恃君覽』の中にそのときの中国の社会状況について次のように描かれている。

「昔太古嘗无君矣，其民聚生群处，知母不知父，无亲戚、兄弟、夫妻、男女之别，无上下长幼之道，无进退揖让之礼。」（昔太古の時代には君子は存在せず、民は集団生活をし、母親を知るが父親を知らず、親戚・兄弟・夫婦・男女の差別もなければ、上下老若の倫理も物事優先の「礼」もなかった。）

このような時代にたとえ呼称があっても、ただ相手を呼ぶための単純なものであり、決して人間関係を表すものではなかったと思われる。

社会生産力が発展し産品が余るようになったことによって、徐々に民族部落ができ、民族の首領が生まれ、また民族部落間での男女婚姻も行

われるようになった。このような社会構造が人間関係を表す親族呼称の基盤となったのだと見なされている。

「随着社会生产力的更大发展，人们的生活水平不断提高，男人在生产中所起的作用越来越大，在家庭和社会中的地位越来越高。（这样）实现了按父系确定世系和财产继承的制度。」（社会生産力がさらに大きく発展するにつれて、人々の生活レベルが絶えず高くなり、男の生産の中での役割が大きくなり、家庭や社会での地位はますます高くなる。こうして家父長制度と財産相続制度が実現された。）李鑑踪（1993）。

こうした部落集団組織はいわゆる血縁関係によってできた男性中心の家父長家族である。その後、この家父長家族から宗族ができて、さらに中国で長期にわたって経過した封建社会を維持する厳格な宗族制度ができた。つまり血縁関係を基盤とする、等級制の厳しい封建社会は、その氏族社会の家父長制度から推移したものである。

宗族制度とは、血縁関係をこの上なく重んじ、一族の中での上下関係を表わす等級、親疎関係を表わす内外の差を厳守されなければならないものであった。したがって、婚姻に対して特に厳しい制限が設けられた。たとえば同宗または親戚関係がある男女は、たとえどんなに愛し合っている、世代が異なる場合、その結婚は絶対に許されなかったのである。宗族内の地位の上下関係を安定させるための禁忌なのである。

宗族制度は、宗族内の世代序列（中国で「輩份」と言う）と同じ世代間の年齢序列（中国で「排行」と言う）が徹底的に尊重され、決して乱すことは許されなかった。それは、世代序列は一族の中でどの等級にいるかを表しているし、同じ世代間の年齢序列は財産相続や地位継承上の権利が違うことを物語っているからである。中国近代の著名作家李伯元の有名な小説『官場現形記』には、科挙試験で秀才に受かって祠堂（先祖を祭るところ）へお参りに行く場面がある。

「当下都让这中举的赵温走在头里，屁股后头才是他爷爷，他爸爸，他叔子，他兄弟，跟了一大串。」（一族は秀才試験に受かった趙温を一番前に歩かせ、その後には彼の祖父、父親、叔父、兄弟が、ぞろぞろと大勢ついていた。）

中国では先祖を祭りに行くときも歩く順番があり、もちろんまず世代順に従うのである。ところが、秀才になった趙温は自分より二世代も上の祖父と父親の前を歩くことが許された。ここでは、作者はこの進行順

序の違いで秀才試験に受かったことがどんなに偉いことなのかを読者に訴えたかったのである。さらに一行は祠堂に入り、中に座っている族長を見て、趙温は「赶忙走过来叫了一声“大公公”。」（かけよって一声「長老さま」と呼んだ。）秀才はどんなに偉くてもさすが族長の上にはなれなかった。ここでもっとも権威のある族長に対して「大公公」と一声呼ぶだけで敬意を表わしている。このことから中国語の親族呼称の威力の一端が窺えよう。

上下・親疎・内外関係が厳しい宗族は、中国のほとんどの地域にあり、またどんなに貧しくても必ず自分の一族に所属し、厳しい宗族制度に従わなければいけなかった。封建社会では、国家の基礎単位は個人ではなくて、血縁関係で結ばれたひとつひとつの宗族だったのである。中国の宗族は連帯感が強いことで、国家としても好んでこの宗族制度を利用して民を管理しようとした。

英国の文化人類学者M・フリードマン（1987）は、中国の宗族（Chinese lineage）と中国社会との関係について『中国の宗族と社会』で次のように述べている。

「（中国）国家は親族関係を大事にした。家族やリネージ（宗族）は、道徳上、善であり、政治上、有用であった。それらは社会的に適切な態度を基礎づけ、そのおかげで国家は社会統制の重荷の大部分から免れた。……（旧国家では労働人民に）〈氏族制度〉や〈家規〉の遵守を当然のことと思込ませて、我々をして封建階級の支配、搾取に喜んで従うよう仕向けることだったのである。」

ここで言われる〈氏族制度〉と〈家規〉は宗族制度及びそれを守るために作られた厳しい規則のことである。

宗族も国家も大事にした宗族制度の言葉での象徴は、なんとといっても上下・親疎関係が明確に表れている親族呼称なのである。中国語の親族呼称体系は、まさに宗族制度が基盤となる封建社会の秩序や倫理道徳観念を守るために生まれてきたものだと言えよう。

2. 親族呼称の分類とその特徴

中国には親族呼称についての書物が多い。その中でも、もっとも古い著書は上述のように上古の郭璞著の『爾雅・釋親』（以下『釋親』と略記）

だと思われている。この中では親族呼称が以下のように四種類に分けられている――。

- (1)「宗族」(父系親族)
- (2)「母党」(母系親族)
- (3)「妻党」(妻系親族)
- (4)「婚姻」(婚姻によってできた親族関係)

「宗族」はいわゆる父系の直系親族なので、非常に細かく記録されており、本人を中心にして、上は4代、下は8代までの親族呼称が紹介されている。父親と同世代の兄弟も年齢順によって「世父」・「叔父」に分けられている。また正妻の後に「妾(庶親)」も入れられている。「母党」はかなり簡単になり、上も下も2代までで、それに兄弟にも父系のように年齢順による区別はない。宗族では、母親側の親族は「外親」に見られ、親族呼称の前にはみな「外」の字がつく。「母党」の冒頭には「母之考為外王父母之妣為外王母」(母の父親は「外王父」と呼び、母の母親は「外王母」と呼ぶ)と記されている。「妻党」はさらに簡単で、上は1代、下は2代までで、また区別がはっきりしないものもある。たとえば、「姑之子為甥舅之子為甥妻之弟為甥姊妹之夫為甥」(妻のおばの子を甥、妻のおじの子を甥、妻の弟を甥、姉妹の夫を甥と呼ぶ)と記され、4つの親族関係を表わしているが、親族呼称はみな「甥」で、語義の区別がつかない。この分類からわかるように、昔の時代では父系以外はそれほど細かく区別せず、いわゆる直系親族の宗族以外は余り厳格ではないことが窺える。最後の「婚姻」はもっとも少なく、上も下も1代だけである。ただし、婚姻は父系と密接な関係があり、宗族では「内親」と見られている。記載されている親族呼称も夫に関するものが半分であり、男性の宗族に入ってくる女性は半分である。たとえば「婚姻」の「子之妻為婦長婦為嫡婦妾婦為庶婦」(息子の妻を「婦」と呼び、長婦を「嫡婦」、妾達を「庶婦」と呼ぶ)部分である。中国では母系親族及び本人の姉妹と娘側の親族は「外親」(外側の親族)だと見られ、親族呼称の前は「外」をつける。また正妻の系統の親族は「嫡親」であり、妾の系統の親族は「庶親」になる。

『釋親』の中の親族呼称は、その後はなくなったり、または全然違う呼び名になったりするものもあるが、現在でもそのまま使っているものも多くある。たとえば、父・母・夫・妻・叔・舅・姐・妹・子女・孫な

どである。

後世になると、『釋親』を基本にして、漏らされたものを補ったり、新しくできたものを増やしたりして絶えず修正されてきた。たとえば古代制度礼儀についての専門書『礼記』の「曲礼下」、秦代末期孔鮒の『小爾雅』、後漢劉熙の『釋名』、三国時代魏の張揖の『広雅』などがあり、特に清代の梁章鉅の『称谓録』は古今呼称の集大成だと評価されている。『称谓録』はそれまでのほぼすべての呼称を集録し、「別類分門、無珍不備。」（種類によって章に分け、集録していない珍しいものはない）（『称谓録・林則徐序』）という呼称の専門書である。全書32巻からなり、第1巻から第8巻までは親族呼称になっている。遠祖から父親まで（いわゆる直系親族）は第1巻、母親系統は第2巻、父母系統は第3巻、兄弟系統は第4巻、妻及び妾系統は第5巻、子女及び孫系統は第6巻、夫妻系統は第7巻、姉妹及び姉妹系統・子女系統・婚姻系統は第8巻である。呼称の数も極めて多く、第1巻の父親の呼び方だけで70余り種類がある。たとえば、子供が父親を呼ぶ場合、人と対面してその父だと自称する場合、他人の父親を呼ぶ場合、実の父を呼ぶ場合、義理の父親を呼ぶ場合、同母異父の父親を呼ぶ場合、亡くなった父親を呼ぶ場合、他人の亡くなった父親を呼ぶ場合などそれぞれの呼称が示されている。数が多すぎるのでここでの紹介は省くが、一言で言えば、呼びかたひとつで、呼ぶ人と呼ばれる人との関係が正確に把握できるようになっているのである。梁章鉅は『称谓録』の「自序」で呼称についてこう述べている。

「古人称谓，各有等差，不相假借。……世代愈積，称谓愈繁。」
（古人が使う呼称はそれぞれ等級の差があり、互いに代用することはできない。……世代が多ければ多いほど呼称の種類も多くなるということである。）

時代が経つにつれて呼称の種類もますます増える、ということも、当時の人人は人間の下上・親疎・内外関係をますます厳格に、そしてますます明確にさせようとしたからに違ひなからう。

現代では、特に中華人民共和国が成立して以来、政府は封建社会の等級宗族制度を批判し、人々がみな平等であると呼びかけている。また宗族の一夫多妻制度を取り止め、一夫一妻制を実行したことによって、正妻と妾との嫡親・庶親系統が完全に解体された。国民は、男女問わず学問をするチャンスを与えられ、それは人人の生活様式に大きな変化をも

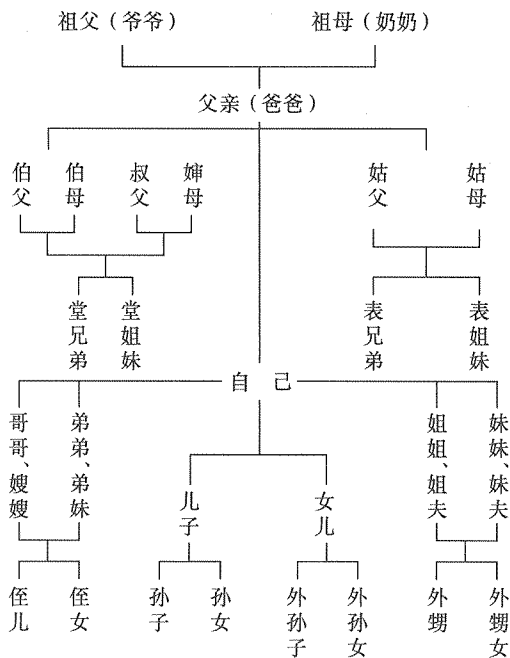
たらした。殊に誰でも社会に進出することができるようになったことで、昔の一族群居の現象が減り、一世代か二世代家族が一般的になり、仕事による移動などで親族間の行き来も昔より少なくなった。複雑な人間関係がなくなり、宗族等級観念は民主平等の観念に変わり、古くから使われた繁多な親族呼称も簡略化された。

とはいえ、数千年にわたって使われた親族呼称とその等級観念は簡単にはなくなるものである。あるいは使い方が同じでもまったく新しい意義になっているかもしれないのである。

今日によく使われている親族呼称について、馬宏基・常慶豊（1998）の3つの表を参照しつつ述べる。

表1は父系、表2は母系、表3は夫妻（婚姻）という分類になっている。3つの表から見て、現代の親族呼称の数はそれほど多くないことがわかる。しかし、全体の骨組は『釋親』と比べて、取り上げられた世代

表1



(父系)

表 2

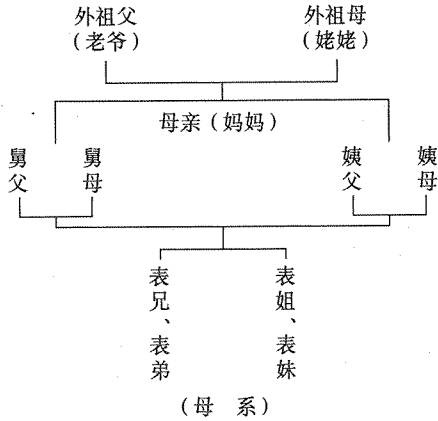
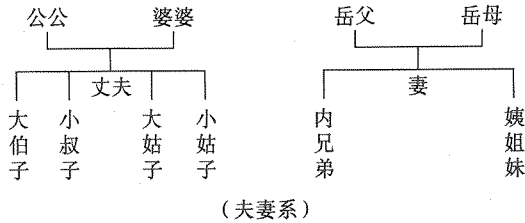


表 3



が少ないこと、一夫一妻制によって「庶親関係」が完全になくなったことを除いて、あまり変わっていないようである。まず分類が『釋親』とほぼ同じであること。その他は、父系の呼称はほかと比べてやはり細かくて数が多い。同世代の親族呼称においても、父親の男性兄弟の年齢序列によって「伯」と「叔」に呼び方が分かれており、父親の姉妹のほうは昔もいまも年齢序列がなく、今は一律に「姑」と呼び、母系も同じく男兄弟をみな「舅」、姉妹をみな「姨」と呼ぶ。また自分の母親・姉妹と娘関係の親族は外親として見られ、母親の両親と自分の姉妹の子供や娘の子供の呼称の前にやはり「外」という字がついている。これも『釋親』とほとんど変わっていない。

数千年も続いた宗族制度の影響は強く、血縁関係を第一にする宗族觀念はそう簡単には消えないものであろう。ただし、昔と違っているの

は、いまの親族呼称が表わしている上下関係は、昔のように家族同士で束縛しあったり、統治と服従の権力関係ではなく、上の世代や年長者に対する尊敬の意と下の世代や年少者に対する愛護の気持ちが含まれている同等関係が主な要素だと言えよう。

3. 親族呼称の転用及びその意義

中国では親族の間で、互いの関係が非常に重視されているので、会話をする前に、なによりもまず相手との関係をよく確認して、相手にふさわしい親族呼称を選ばなければならない。さもなければ教養のない人だと軽蔑されたりする。映画『心香』の1シーンを見てみよう。それは両親の別居により母親方の祖父のところに預けられる少年「京京」の祖父との会話の場面である（松竹ホームビデオによる）。

京京：〈祖父に向かって〉 厕所在哪儿？（トイレはどこ？）

祖父：〈孫に向かって〉 你就不能叫我一声外公？ 跟你那个爸爸一样，从来没叫过我一声爹。（おまえは「おじいちゃん」と呼ぶのか？ おまえの父親と同じだ。おまえの父親も一度もおとうさんと呼んでくれなかった。）

この祖父が怒ったのは、「おじいちゃん」と呼ぶか呼ばないかという単純なことではなくて、孫としては「おじいちゃん」という上位親族呼称（目上の人に対する呼び方）を使ってくれないのは自分にはとても面子が立たないことと、娘夫婦の子供に対するしつけがよくないという不満のふたつの要因がある。

中国人は親戚と会うとき、相手のことをなにも呼ばず、ただ「こんにちは」のような挨拶をするだけでは、非常に失礼なことになるので、必ず下の世代に、これから会う人のことをどう呼ぶべきかを教えるのである。そのこともあって、中国では言葉を習得し始める子供にまず教えるのは親族呼称である。人に会うとすぐ、その人にふさわしい親族呼称で呼ぶことができる子供のことを「真懂事儿」（お利口さんだね）、「嘴真甜」（口が上手な子だね）などと言って誉めたり、子供のしつけがよろしいと親を誉めたりするのである。一般的にまだ社会に出ていない子供、すくなくとも小学校までの子供の場合は先生以外の人に対して、ほとんど社交呼称を使わず、親しみのある親族呼称を使うのである。中国のあ

る小学生は作文の中で、元総理大臣故周恩来の夫人鄧穎超のことを「鄧穎超奶奶」と呼び、昔の中国の最高指導者鄧小平のことを「小平爷爷」（六年生小学・第9冊『作文』による）と呼んでいる。そう言えば、文化大革命が始まったばかりの時期に、まだ小学生だった私も、中学校や高校の紅衛兵のことをいつも「紅衛兵哥哥（紅衛兵兄さん）」「紅衛兵姐姐（紅衛兵姉さん）」と呼んでいた。

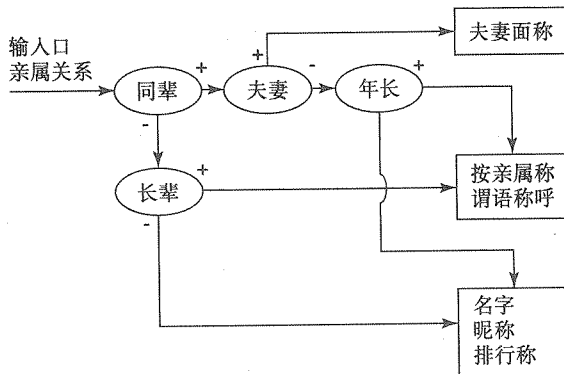
中国語の親族呼称の使い方をまとめてみると、次の原則がある。

- ①下の世代は上の世代に対して必ず親族呼称で呼ばなければならない。
- ②同世代では、年少者は年長者に対して一般的に親族呼称で呼ぶ。年長者は年少者に対して名前や愛称で呼ぶのが普通だが、親族呼称で呼んでもいい。
- ③上の世代は下の世代に対して、一般的に名前か愛称などで呼ぶが、親族呼称で呼んでもよい。
- ④夫婦の間では、昔はよく子供の名前の後に「～他爸」（～の父さん）をつけて夫を、「～他妈」（～の母さん）をつけて妻を呼んでいたが、いまは互いに名前か愛称で呼ぶのが普通である。

この原則は現在だけではなくて、古い時代でも同じであった。『称谓語』は、親族呼称の使い方をコンピュータのフローチャートにして、分かりやすく説明している。（表4参照）

以上に述べたように、中国語の親族呼称は人間関係を一目瞭然と表わ

表 4



す特徴を持っているので、中国人はこの親族呼称を表現のテクニックとして会話の中に応用し、発話の効果を高めようとしたり、ときには自分と相手の関係を人為的に変えたりして、相手に強い印象を与え、発話の意図を果たそうとしたりする。以下は実際の例を見ながら、その使われ方と意義を検討してみる。

例1 嫁が舅に向かって言った言葉（曹禺の『北京人』1940）

嫁：媳妇给爹敬酒。（おとうさま、もう一杯どうぞ。）

この台詞を直訳すれば「嫁がおとうさまにお酒をお注ぎします。」となるが、日本人にはくどくて不自然に思われよう。確かに中国でもこの場合普通は、自分のことを第一人称「我」を使い、相手のお父さんのことを第二人称の尊称「您」を使うのが一般的だが、ここで嫁がわざと自分がこの家での身分を表す「媳妇」という親族呼称を使い、相手のことを、家の中でとても権威のある「爹」という親族呼称を使うのは、嫁と舅の上下関係を言葉にして、自分の親孝行の態度を強く示そうとする目的があるからであろう。

例2 母親が実の娘に向かって言った言葉（曹禺の『雷雨』1934）

母親：你听，外面打着雷。可怜你的妈，我的女儿在这些事上不能再骗我！（ほら、外は雷だよ。私の娘なら、母さんのことも考えて、その事についてもうこれ以上母さんを騙してはいけないよ！）

これは隠し事をしている娘を説得する1シーンである。この台詞を直訳すれば「ほら、外は雷だよ。お母さんのことを哀れんでおくれ、私の娘はそのことについてもうこれ以上私を騙してはいけないよ。」となる。娘に向かって自分のことを「あなたの母さん」と言い、娘のことを名前や愛称ではなく「私の娘」と言ったのは、例1と同じく親族呼称を用いて、娘に自分との血縁による上下関係を再認識させ、説得効果を高めようとしたのである。

例3 従姉妹間の会話について評価する言葉（曹雪芹の『紅樓夢』）

「（林黛玉）连宝钗前亦直以“姐姐”呼之，宝琴前直以“妹妹”呼之：俨似同胞共生，较诸人更似亲切」（林黛玉は宝钗のことを「姐々」と呼び、宝琴のことを「妹々」と呼んだりして、まるで同胞兄弟のようで、ほかの人よりもさらに親しいようだ）。

これは中国古代名作のひとつと言われている『紅樓夢』第58回の一節である。この中に出ている林黛玉は、宝钗と宝琴とは従姉妹関係であ

る。中国の親族呼称の原則としては、実の兄弟姉妹ではない場合は、相手の名前の後に親族呼称をつけて呼ぶのが普通である。林黛玉が従姉妹の「宝釵」と「宝琴」のことを実の姉妹と同じように呼んだのは、相手と実際の親族関係よりも近い関係を持ちたい気持ちがあるからである。つまり親族呼称を生かして相手との心理的な距離を縮めたかったのである。

例4 父親が実の息子に向かって言った言葉（曹禺の『北京人』）

父親：我给你跪下，你是父亲，我是儿子，我请你再不要抽，……

（父さんはおまえの前に跪くよ，これからきみのことを「父さん」と呼び，父さんのことをおまえの「息子」だと呼んでもいいから，どうかこれ以上吸わないでくれ……）

息子：〈突然意识到自己的罪恶，扔下烟枪〉妈呀！（〈突然自分の罪を認識し，鴉片のキセルを捨てて〉母さん！）

これは父親が鴉片を吸う息子を説得する場面である。台詞の意味を直訳したので，日本人には理解しがたいであろう。たいへん極端な例かもしれないが，父親は自分の息子のことを「父さん」と呼び，息子に自分のことを「息子」だと呼ばせて，実際の上下関係を逆にした。例2は娘を説得したくてわざと親族呼称を使ったのだが，この父親は自分の面子を捨ててもなにをしてでも息子を鴉片から救い出してやりたかった。この親族呼称の力がどのくらい大きいかは，息子が突然自分の罪悪を認識し，鴉片のキセルを捨てたという結果からも窺うことができる。

例5 夫が甥と妻の前で，甥と自分の若い妻の間にできた子供（天白）に向かって言った言葉（徳間書店ビデオ《菊豆》による）

夫：叫啊！（呼べ！）

天白：爹！（お父さん！）

夫：大声喊！（大きな声で！）

天白：爹！（お父さん！）

夫：哎！再喊啊！（はい！もう一度！）

天白：爹！（お父さん！）

夫：〈妻を指して〉天白，来，那就是你娘。（天白，おいで。その人がおまえの母さんだ。）

天白：〈母親に向かって〉娘！（お母さん！）

夫：〈甥を指して〉那就是你哥！（そちらはおまえの兄さんだよ。）

天白：〈実の父親に向かって〉哥！（お兄さん！）

〈甥は非常に辛そうな表情〉

夫：〈自分を指して〉我是你爹。（お父さんだ。）

天白：爹！（お父さん！）

夫：〈得意そうな表情で〉哎！ 哈哈，我的儿啊，叫得好！ 乖儿子，你记住啊，就这么叫。哈哈哈哈哈……。〈はあい！ ハハア、いい子だ。よく言えたぞ。覚えとくんだ、今の呼び方をな。ハハハア……〉

〈妻は泣きそうになる甥を必死で慰める〉

これは、'90年カンヌ国際映画祭第1回ルイス・ブニュエル賞を受賞した話題作で、中国の昔の家族生活がよく描かれた映画《菊豆》の1シーンである。

主人公は菊豆という名前の若妻である。歳が大分離れた染め屋さんの主人に妻として買われたが、毎日性的虐待をされて体中傷だらけだった。染め屋の甥はそれを見て大変哀れに思い、後に二人は深い愛情に落ちる。ついに菊豆が夫の甥の子を身ごもり、男の子「天白」を出産した。自分の子ではないことを知った染め屋の主人は大変悔しくて、どうしても復讐しなかった。そして思いついたのは、この例5の親族呼称で虐める方法であった。染め屋の主人は甥と自分の妻の前で、天白に実の父親を「お兄さん」と呼ばせて、元来親子という上下の世代の関係を兄弟という同世代の関係にし、また自分を「お父さん」と呼ばせて、甥から血縁関係がもっとも近い親族呼称を奪った。それで大変男前の甥も大きい声を出して男泣きをしたのであった。中国人は実にこの親族呼称にこだわっている。

会話の中で中国人はまた、相手に対する呼称を換えたりして、自分が相手に対する気持ちの変化を伝えようとする。映画『変臉』の主人公老芸人は貧しくて、若いうちに妻に蒸発され、息子には病死され、一人で先祖が伝来の「変臉」の芸を披露することによって生計を立てていた。中国では昔から芸は男の子にしか引き継がせない伝統があるので、老芸人は人買いから一人の男の子を買った。

例6 老芸人が人買いから男の子を買う場面（株式会社アミューズビデオによる）

人買い：〈男の子を指して〉你给10块圆大头，娃娃就归你了。（10塊

でこの子をあんたに譲ってやるよ。)

老芸人：10块？ 漫天要价。我不是 神爷！〈立ち去ろうとする〉
(10塊？ でたらめな値をつけるな、おれがそんな金持ちに見えるか？)

人買い：给5块吧。(5塊ならどうだい？)

〈老芸人は振り向かずに前の方に歩きつづける。〉

男の子：〈大きい声で〉爷爷！（おじいちゃん！）

〈老芸人は立ち止って振り向き、結局男の子を連れて帰る〉

人買いが半値にしてくれても、老芸人は動揺しなかったのに、なぜ男の子の「おじいちゃん」という一声で買う決心をしたのか、それは「おじいちゃん」という親族呼称が、赤の他人という遠かった心理的な距離を、親族関係というごく近い距離まで縮めたからなのである。つまり男の子は「おじいちゃん」という親族呼称で、自分の前を立ち去った老芸人を呼び戻したわけである。

場面は変わって、ある日老芸人はその子が実は女の子であることを知った。次は、たいへん失望した老芸人と、そばに置いてくれるよう懇願する女の子との会話である。

女の子：爷爷！ 爷爷！（おじいちゃん！ おじいちゃん！）

老芸人：别叫我爷爷。你以后就叫我老板，留在我这儿干杂活儿。

(おじいちゃんなんて呼ばないでくれ！ これからはご主人様と呼べ。私のところで働きなさい。)

というように、老芸人は二人の関係を他人の関係に戻したいときに、親族呼称で自分を呼ぶのを止めさせたのであった。

しかし、女の子は自分に優しくした老芸人に精一杯尽くし、最後に彼を助けるために若い命までかけた。老芸人は非常に感動した。映画は、老芸人と女の子との次の会話で幕を下ろす。

女の子：〈老芸人に向かって〉老板！（ご主人様！）

老芸人：狗娃，叫爷爷，叫爷爷！（クーワーちゃん、おじいちゃんと呼んでくれ、おじいちゃんと呼んでくれ！）

女の子：〈大きい声で〉爷爷！ 爷爷！ 爷爷！（おじいちゃん！ おじいちゃん！ おじいちゃん！）

ちなみに映画の日本語の字幕は「おじいちゃん、大好き！」になっている。これは恐らく訳者はその訳がもっとも女の子の気持ちを表わせる

し、映画の最終の台詞としてもっともふさわしいと思ったのであろう。老芸人と心を通わせるものとして、この呼称は非常に効果的に使われている。ここに中国の社会と言語習慣の特徴を垣間見ることができるであろう。

中国親族呼称のもうひとつの特徴は、相手に対して上位親族呼称を使うことで相手を見上げることになり、相手を丁寧扱っているという心理的な合図である。逆に相手に対して下位親族呼称（目下の人に対する呼び方）を用いると、相手を見下していることになり、相手をばかにしていることになるのである。だから中国語の下位親族呼称は罵倒語でもある。たとえば親族呼称の中で「孙子」（孫）は最下位の呼称なので、実の祖父と孫の関係ではなければ「你是孙子」（おまえは孫だ）と言われたら、恐らく怒らない中国人はいないのであろう。逆に、相手の前で威張りたとき、実際より上の世代の親族呼称を使って自称することもよくある。

例7 三十歳あまりの男性が親しい同世代の男性に向かって言った言葉
（老舎の『茶館』1957）

「哎哟，他妈的是你，小刘麻子！ 来，叫爷爷看看！」（ありゃりゃ、べらぼうめはおまえか、劉公！ おいで、おじいちゃまにみせてごらん！
——『老舎珠玉』黎波訳）

ここの「おじいちゃま」は話者自身のことを指している。では、なぜ話者は聞き手の「劉公」と同世代なのに「おじいちゃま」と自称したのかは、日本人の読者にとって上の訳文を読んだだけではほんとうの意味が分らないであろう。話者は普段「劉公」のことを軽視しているので、彼の前でわざと自分の地位を2世代分も嵩あげして、傲慢な態度を見せつけ、相手を見下そうとしたのである。

おわりに

中国は古くから血縁関係をもっとも大事にしてきた。たとえ現在でも家族の絆はなによりも固いものである。この血縁関係を基盤にできたのは宗族制度であり、またその宗族制度は、血縁関係を明確に表わす親族呼称によって守られてきたと言うことができる。

親族呼称は、血縁関係を表す言葉であるが故に、社会背景に左右され

ることなく、いつの時代も相対的に安定していた。そして、親族呼称は、中国語の待遇表現の中で重要な位置を占めている。親族呼称を上手く使えるかどうかはその人の教養度の印にもなっている。そのため、親族呼称の分析を通して、古今の中国の社会構造や、民族文化の特徴などを知ることができるのである。

親族呼称の転用の例は、非常に多い。著名な作品を例にすると、古代では『三国志』、『水滸伝』などがあり、近代では老舎の『駱駝祥子』、『四世同堂』、魯迅の『阿Q正伝』、夏衍の映画脚本『林家鋪子』、現代では文化大革命時期の生活の一面を描写した映画『芙蓉鎮』、改革開放政策が実施されて以来の人間模様を描く人気ドラマ『編集部的故事』など枚挙にいとまがない。

この種の用法は中国言語文化の特徴のひとつであって、それを通して、コミュニケーションに参加する話し手と聞き手との相互関係を把握することができるし、またそのつど話し手の心理的な態度を察することができるのである。

近年、中国の呼称についての研究も増えている。しかし、各場面の具体的な使い方やそれによって表された社会文化の特徴についての研究はまだ少ない。たとえば、現在の日常生活における親族呼称の非親族間での運用、一人っ子政策による家族構成の変化に伴う親族呼称の異変、さらにまた、外国語との比較研究など多くの課題が残っている。今後も一連の研究を続けたいと考えている。

(小論の執筆にあたっては、文教大学教授遠藤織枝先生及び本務校の諸先生に日本語などについていろいろと貴重なお助言をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。)

引用・参考文献

- 神田千冬 (1987) 「『红楼梦』における親族呼称と身分呼称上・下」『中国語研究』(87春季号・87秋季号) 白帝社
- (1988) 「『红楼梦』における親族呼称と身分呼称(続)」『中国語研究』(第29号) 白帝社
- 胡明揚 (1987) 『北京話初探』商務印書館
- 蔡希芹編 (1994) 『中国称谓辞典』北京語言学院出版社
- 作文研究中心編 (1989) 『作文』(六年制小学第9冊) 文心出版社

- 周慶生 (1997) 「亲属称谓等級称与封建领主等級制」『語言教学与研究』(1997年
第3期) 北京語言文化大学出版社
- 祝曉瑾 (1990) 「汉语称呼研究」『北京大学学报』(英语语言文学专刊1990年)
- 徐静茜 (1993) 「从《紅樓夢》人物的对称看当时的社会文化」『語言与文化多学科
研究』陳建民主編 北京語言学院出版社
- 曹禺 (1934) 「雷雨」『曹禺選集』(1978) 人民文学出版社
- 曹禺 (1940) 「北京人」『曹禺選集』(1978) 人民文学出版社
- 高島俊男 (1979) 「水滸伝の称呼(-)」『中国語研究』(19号) 白帝社
(1981) 「水滸伝の称呼(二)」『中国語研究』(20号) 白帝社
- 張清常 (遺作) 「《尔雅·释親》札記」『中国語文』(1998年第2期) 商務印書館
- 陳建民 (1989) 『語言文化社会新探』上海教育出版社
- 遙永順 (1985) 「称呼語及其使用」『語言教学与研究』(1985年第2期) 北京語言
文化大学出版社
- トラッドギル, P. (1975) 『言語と社会』(土田滋記) 岩波書店
- 馬宏基・常慶豊 (1998) 『称谓語』新華出版社
- 福地滋子 (1974) 「北京語における親族名称の一用法」『中国語学』(219号)
- 藤本和貴夫・木村健治編 (1997) 『言語文化概論』大阪大学出版社
- フリードマン, M. (1987) 『中国の宗族と社会』(田村克己・瀬川昌久訳) 弘文
堂
- 楊忠・張紹傑 (1995) 『語言理論与応用研究』東北師範大学出版社
- 李鑑踪 (1993) 『姻縁・良縁・孽縁』四川人民出版社
- 劉煥輝 (1992) 『交際語言学導論』江西教育出版社
- 老舍 (1957) 「茶馆」『中国現代名劇丛书』人民文学出版社 (1994)
- ロメイン, スザーン (1997) 『社会のなかの言語』(土田滋・高橋留美訳) 三省堂
<古い文献>
- 『爾雅音圖』郭璞注(晋) 爾雅五種 藝文印書館 (1988初版)
- 『称谓録』梁章鉅著(清) 天津古籍書店出版 (1987序刊)
- 『紅樓夢』曹雪芹・高鶚著(清) 人民文学出版社 (1957)
- 「官場現形記」李伯元著(清) 『李伯元全集・2』薛正興主編 江蘇古籍出版社
(1997)